

二〇二二年一月一六日

祢宜ひとり烟るどんどを育てをり
鶴首に一茎凜と黄水仙
隙間風ことごとと鳴る鍋の蓋
連山に一灯ともる寒さかな
愚痴いはず小言もいはぬ懐手
三寒の朝礼長し消防署
どんどの火消えて居眠る祢宜の午後

二〇二二年一月一五日

健願ひどんど焼を浴びにけり
木霊棲む峽を響もす大とんど
機を織る外は近江の虎落笛
記念日の二つ重なり小豆粥
どんど焼分別されてをりにけり
竹林にいまはの際の冬日燃ゆ
浮島の葎が鴨のハレムかな
冬夕焼棚田の畦の幾何模様

二〇二二年一月一四日

長老の片肌脱ぎや弓始
雪雲の裾をこぼるる日射しかな
牧牛の尾の先の触れ草萌ゆる
燃え盛るストーブ囲み相寡黙
枝絡む陽に天を突く冬芽かな
臘梅の日差しふふみて香を放つ
託されし老犬撫でて春を待つ

せいじ 満天 豊実 みづき もとこ 素秀 あひる ぼんこ うつぎ 凡士 こすもす たか子 あひる せいじ 素秀 なたつき やよい 音吉 あひる やよい 満天 むべ

二〇二二年一月一三日

五箇山の結いでつなげる雪下ろし
竹馬に親の背越ゆる笑顔かな
どんど燃ゆ躍る炎の影法師
左義長の焦げあと凹む郷の宮

二〇二二年一月二日

大淀の風に機嫌や七連凧
しんしんと降る雪に鹿身じろがず
登山具の遺品に夫の肝葉
白き息ぴたと止まりて矢を放つ
連凧の忙しく向きを変へにけり

二〇二二年一月二日

老松の手当のごとく菰巻きす
糟糠の妻もほんのり屠蘇の酔
百歳は近くて遠し福寿草
奥能登の二重に構ふ風囀

二〇二二年一月一日

的中に姿勢揺るがぬ弓始
凍滝といへどかそけき水の音
神座すと仰ぐ美空の淑気かな
朝まだき風紋のまま川凍る
御慶述べ手に手にほうき清掃日

凡士 素秀 智恵子 こすもす あひる あられ むべ なつき あひる なたつき 宏虎 宏虎 凡士 なたつき 素秀 むべ 明日香 たか子

毎日句会みのる選・二〇二二年一月一八日